The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	短期留学生は課題解決型学習（PBL）を通してどのような力を伸ばすのか ： 母国および留学先の地域の課題解決に向けて
Author(s)	小森, 万里; 藤平, 愛美
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2024, 22, p. 13-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95200
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

短期留学生は課題解決型学習（PBL）を通して どのような力を伸ばすのか
―母国および留学先の地域の課題解決に向けて―
What Skills do Short-Term International Students Develop through PBL?: Exploring Solutions to Issues and Challenges in Their Home and Host Communities

小森 万里・藤平 愛美

【要旨】

大阪大学短期交換留学プログラムの必修科目では、課題を発見し他者と協働しながら解決方法を見つけ発信する力を育成することを目指し、留学生の母国および留学先の地域についての課題解決型学習（PBL）を行っている。2022年度秋～冬学期は、各学生が自分の国・地域・町についてのPBLの成果をクラスで発表し、2023年度春～夏学期は、留学先である箕面市の課題解決方法をグループで考え箕面市の人々に向けて成果を発信する活動を実施した。各クラス活動実施後のアンケート調査結果と学期開始時および終了時のルーブリック評価などから、２学期間の実践を通してプロジェクトが質的に変化し、クラスメートの捉え方にも変化が見られ、最終的に協働力、発信力、客観的分析力といったジェネリックスキルの発達があったことがわかった。

１．はじめに

大阪大学日本語日本文化教育センターがデザインする短期留学特別プログラム「メイプル・プログラム」では、毎年約20の国・地域から80人程度の留学生を受け入れている。受け入れ留学生の日本語レベルは日本語能力試験のN4合格程度以上で、初中級から上級までの留学生を６～８クラスに分けて運営している。

本プログラムの目的は、「知る・伝える・話し合う」という３つのコミュケーションスキル向上を通して、他の文化の人たちや社会とつながることができる人の育成をすることである。そのため、週１コマある必修の「日本語日本文化専門演習（以下、MDR）」という演習科目では、グループ活動と体験を通しての学びを重視した授業を行っている。

このMDRでは2020年度春～夏学期より課題解決型学習（Project-based Learning: 以下、PBL）を行っているが、この背景には、2021年度に予定されていたキャンパス移転があった。旧キャンパス周辺ではすでに長年にわたり留学生は地域の人々に受け入れられていたが、移転先の新しい地域で一から留学生を理解し受け入れてもらう必要があり、留学生と地域住民との新たな関係性構築のための方策が重要課題となったためである。そのため、留学生が留学先の地域についての理解を深め、住民とつながる活動を行うことを目指した。幸いなことに、移転先である箕面船場地区は、2021年３月の大阪大学箕面キャンパスの移転に加え、2024年３月の北大阪急行電鉄南北線の延伸による新駅開業を控えて今後の新しいまちづくりが期待されているところであり、地域の皆様には、新しい住民である留学生にも関心をもっていただき、本プログラムのPBLにも積極的に協力いただいている。

このように地域の課題について考えるPBLを行うことは、留学生にとってどのような力を発達させることにつながるのだろうか。また、地域の人々と連携してPBLを行うことによって、どのような学びがあるのだろうか。本稿では、メイプル・プログラムの留学生が自分の国・地

域・町の課題解決を考えるPBL、あるいは留学先である箕面市の課題解決を考えるPBLを通してどのような力を伸ばすのかについて明らかにしようとするものである。

2．先行研究

留学生と地域をつなぐ実践はこれまでもさまざまな大学で行われている。

まず、地域理解・文化理解を目的に行われた実践については、留学生と日本人学生との共修によりともに市民として生活する「鹿児島」についての理解を深めるための「多文化間プロジェクト型協働学習」を行ったもの（中島 2013)、地域住民と留学生が仙台すずめ踊りをともに練習し祭りに参加しつつ文化概念を学び、地域の祭りに取り組む姿勢や練習の方法などの考察を通して日本社会や日本文化への理解を深めたもの（島崎 2018)、サービス・ラーニングの枠組みにより留学生による「まち歩き」のルートとそのPRビデオを作成し地域住民に向けて発表したもの（板橋他 2020)、小川町にぎわい創出課の協力を得て地域の文化財や地場産業の理解をめざし街歩きや紙すき体験などを行ったもの（村越 2021)、こども食堂でのサービス活動を授業に組み込み日本社会や文化への見識を広める実践を行ったもの（菅川 2023）などがある。また、地域の課題解決に向けての学習活動としては、地域との互恵関係を構築する方策や多文化共生社会における地域振興の方策を留学生と日本人学生がともに考え、地域の人々に向けて発表したもの（林・大塚 2023)、地域との関係性構築を目指した取り組みについては、地域の魅力を伝えるポスター作成を行う過程での地域住民との触れ合いを通して個と個の繋がりの形成がなされたもの（金丸 2021、2022）などがある。さらに、板橋他（2020）では体験学習を通して日本語力に伸びが見られたことが報告され、金丸（2022）では「生活文脈や地域住民とのやりとりの空気感をからだで受け止め、自分の実感に裏打ちされた自分なりの意味を見出した言葉や表現を使うという意味での『自分ごとの日本語の学び』」があったことが報告されるなど、日本語運用力の向上という点からも地域とのつながりによる授業実践には効果があることが報告されている。

以上の実践から、留学生と地域をつなぐ取り組みを通して、地域理解や日本社会・日本文化理解、地域との関係性構築につながるだけでなく、地域を自分事としてとらえた課題解決方策の考案や、そこから得られる自分事としての日本語の学びが可能となっていることがわかる。しかし、これまでの実践は教師の主導による授業運営が多く、留学生自身が課題設定し、計画を立て、ペース配分を考えながらプロジェクトを主体的に運営していくという実践は必ずしも多くはなかった。

これに対し、メイプル・プログラムでは、留学生自身が主体となってプロジェクト運営をするPBLが目指されてきた。第１回のPBL実践となった2020年度春～夏学期は「箕面らしさについての探究」を行うもので、各クラス３～５グループに分かれ、グループごとにテーマを決め、地域の専門家である箕面観光ボランティアガイドの皆様とPBLの専門家である本学COデザインセンター教員の協力を得ながら、各グループがそれぞれの観点から箕面らしさを探究するプロジェクトを行った。コロナ禍でのオンラインによるグループ活動であったが、この活動における留学生の学びの成果として主体性・積極性をもった取り組みができたこと、市民団体や他部局教員と日本語で関わる機会になったこと、地域社会への深い関心をもつようになったことなどがあったことが立川他（2022）で報告されている。ただし、「なぜ箕面市について学ぶのか」

と疑問に思う学生もおり、当事者意識をもった探究という点では課題があった。また、岩井他（2023）では、2021年度２月にNHK大阪拠点放送局（現在はNHK大阪放送局）の協力を得て行った特別セミナー「Let me know! Minoh! セミナー」によって、コロナ禍で渡日できない状況の中でも、箕面市についての情報獲得や箕面市のイメージ喚起、箕面市への興味の高まり、箕面市民との関係性構築への期待の高まりなどの心的変容があり、渡日後の2021年度春～夏学期のPBLでは自分事として箕面市の課題をとらえる観点が養われたことが報告されている。

３．本稿の目的

２節で述べたように、メイプル・プログラムのPBL は2020年度春～夏学期以降、毎年改良を重ねる中で、単なる知識の獲得と地域への興味喚起から、地域との関係性構築への期待を高め、さらにプロジェクトを通して留学先の地域の課題を自分事として捉えるようになり、地域に対する関わり方の変化につながるなど、学生の心的変容については検証されてきた。しかし、どのようなクラス活動によってどのような能力が向上するかについては検証されていない点が課題であった。

そこで、本稿では１つのクラスを取り上げ、このPBLにおいて、どのような授業実践を通してどのような能力が育成されたのかを、学生たちに対するアンケート調査結果とルーブリックによる評価の分析を行うことによって明らかにする。

４．授業の概要

４．１　受講生と授業運営者

本稿で取り上げるのは、メイプル・プログラムの中の１つのクラスの受講生である。日本語レベルは、本センターの日本語能力基準でB1（中級）またはB2（中上級）と判定された学生の混合クラスである。このレベルを取り上げるのは、渡日時にはまだ日本語を使って調査を行ったり自分の意見を論理的に組み立て他者に向けて発信したりするということが難しいレベルであることから、これらの学生たちの能力の発達について検証したいと考えたためである。

受講生は９人で、国籍はイギリス、インド、スペイン、フランス、ドイツ、タイと多様な国・地域からの留学生が集まったクラスであった。授業担当者は本稿の筆者２名である。また、大学院留学生のティーチングアシスタント（以下、TA）が１人おり、受講生のグループ活動のサポートをしていた。

表１　受講生の人数・国籍・日本語レベル

人数	９人
受講生の国籍（人数）	イギリス（１）、インド（１）、スペイン（１）、フランス（１）、ドイツ（２）、タイ（３）
2022年度秋～冬学期の日本語レベル	B1（中級）２人、B2（中上級）７人
2023年度春～夏学期の日本語レベル	B1（中級）１人、B2（中上級）８人

表２　授業運営者

授業担当者	2022年度秋～冬学期：Ｋ教師、2023年度春～夏学期：Ｆ教師
TAの国籍、人数、学年	中国、１人、博士前期課程２年

4．2　授業の目的・評価方法

メイプル・プログラムでは、１年の留学期間の中で最初の半年（秋～冬学期）をPBLの方法を学ぶ時期と位置づけ、後半の半年（春～夏学期）をPBLを本格的に行う時期と位置づけている。本節では、2022年度秋～冬学期から2023年度春～夏学期の授業実践について、各学期の授業目的、授業内容、そして評価方法について説明する。

渡日後１学期目となる2022年度秋～冬学期の授業では、①次学期実施予定の「箕面市についてのPBL」の前段階としてPBLの方法を学ぶこと、②プロジェクト実施に必要なスキルを発達させること、③次学期のグループで行うPBLに向けてクラス内の人間関係を構築することの３点を目的としていた。そのため、授業内容は、学生が個人で自分の国・地域・町[1)]がどんな所であるかを調べ、課題を発見し、解決方法を考え、発表・発信するPBLを行うというものであった。渡日直後の学生は留学先での生活に不案内であり、またインターネット記事やSNS等で箕面市のローカルな情報の詳細を得ることが難しいため、まずは自分の国・地域・町について調べることを通して、課題を見つけるということはどのようなことなのかを学んでいくことが目指されている。また、春～夏学期にはさまざまな国・地域からの学生がグループを作り、価値観の異なる者との協働を通してPBLを行うことが求められるため、クラス内での人間関係を構築することも重要な目的の一つであった。この授業の評価方法は、授業参加態度・PBLへの取り組みが60％、発表会の成果をルーブリックで測ったものが40％という内訳となっていた。

2023年度春～夏学期の授業では、①前学期に学んだPBLの方法を活用してグループでプロジェクトを行うこと、②実際に課題解決に取り組むことを目指すこと、③客観的な視点を持ちプロジェクトを運営できるようになることの３点を目的としていた。そのため、授業内容は、３～４人のグループで留学先である箕面市の課題を発見し、解決方法を考え、地域住民に向けて発表・発信するPBLを行うというものであった。渡日後半年経ち、PBLの方法を理解しクラスメートとの人間関係構築もできた学生が、自分たちのプロジェクトに対して客観的な視点をもちながらプロジェクトを主体的に運用できるようになり、課題解決の提案にとどまらず、実際に課題解決のための行動に取り組めるようになることが目指されていた。この授業の評価方法は、PBLの過程（授業活動への参加度）に対する評価が50％、PBLの成果をルーブリックで測ったものが50％という内訳であった。

表３　プロジェクトのテーマ

学期	発表タイトル（テーマ【国】）
2022年度 秋～冬学期	・サムットプラカーンの課題（水質汚染【タイ】） ・シンブリー県どんな町？（ゴミ問題【タイ】） ・ウッタラーカンド（環境問題【インド】） ・イギリスの教育問題（教育格差【イギリス】） ・ナンシーについて（公共交通機関の問題【フランス】） ・アルガンダデルレイ（公共交通機関の問題【スペイン】） ・ドイツの課題（看護師不足【ドイツ】） ・私の町ドルトムント（失業問題【ドイツ】） ・自分の町はどんな町？―ラノーンはどんな課題がある？―（移民と地域共生【タイ】）
2023年度 春～夏学期	・箕面の生活を楽にしよう！留学生のサポートガイド ・箕面市でレンタサイクルの可能性を見つけよう ・カレンダーで見る四季折々の箕面― 一年を通じてイベントを体験しよう ―

このような授業実践を通して学生たちが運営したプロジェクトのテーマは、表３に示した通りである。2022年度秋～冬学期は、自分の国・地域・町についての環境、教育、公共交通機関、看護師不足、失業、移民と地域共生等に関するテーマを選び、それらの課題解決のために自分たちの行動をどう変えればよいのか、行動の変容を実現するためにどのような解決方法があるのかについて考えたプロジェクトが行われた。2023年度春～夏学期は、留学先の箕面市で生活する留学生としての視点を生かし、渡日したばかりの留学生にとって必要な情報を提供する媒体の作成や、バスが主要な交通手段となる箕面市において留学生がより快適に移動できる手段を提供するための提案、年間を通して箕面のイベントを楽しみ箕面についての理解を深めることをめざしたカレンダーの作成などのプロジェクトが行われた。

５．2022年度秋～冬学期の授業実践

本節では、2022年度秋～冬学期の授業実践について説明する。まず、15回のシラバスは表４の通りである。以下、4.2節で述べた本科目の３つの目的（①PBLの方法理解、②プロジェクト実施のためのスキル発達、③クラス内の人間関係構築）のためにどのようなことに留意して授業を行ったかについて説明する。

表４　2022年度秋～冬学期のシラバス

回	日付	内容【活動形態】	回	日付	内容【活動形態】
1	10/11	オリエンテーション、教師/TAの国・町の紹介【クラス】	9	12/13	中間発表会①【クラス】
2	10/18	自分の国・町の紹介【グループ→クラス】	10	12/20	中間発表会②【クラス】
3	10/25	箕面市の取り組み紹介 自分の国・町の課題【グループ→クラス】	11	1/10	実現可能な解決方法とは【グループ】
4	11/1	実地見学：箕面大滝・勝尾寺の見学 【プログラム】	12	1/17	座談会：箕面の人々の取り組み 【プログラム】 交流会（授業後、希望者のみ参加）
5	11/8	自分の国・町の課題【グループ】	13	1/24	座談会のFB、クラス発表会の準備 【クラス→個人】
6	11/15	引用のしかた、課題への対応の現状 【グループ→クラス】	14	1/31	最終発表会①【クラス】
7	11/29	先輩のプロジェクトの紹介、 課題の解決方法【グループ】	15	2/7	最終発表会②、ふりかえり【クラス】
8	12/6	特別セミナー（学外ゲスト）：課題設定と行動計画の立て方 【プログラム→クラス】			

まず、第一の目的（PBLの方法を学ぶ）については、５つの留意点があった。１つ目は、授業開始時にPBLのフローチャートを示して現時点でのPBLの段階を確認し、その日の授業の目的を明示したうえで、授業を始めることである。図１は第３回の授業で使用したフローチャートである。現在のPBLでの段階と、その日の授業でどこまでPBLを進めることを目標としているかを色をつけて示すことによって、学生たちがPBLの中での進捗を把握できるようにした。２つ目は、授業終了時に各自のプロジェクトの進捗状況と次回までの宿題と次回の予定をクラス全体で確認したことである。毎回これを行うことで、学生自身がプロジェクトの進み具合を

確認でき、次回までに何を行う必要があるのかを自ら考えることができるようにしていた。３つ目は、教師とTAがそれぞれの出身町について課題を説明したり、現状がどうなっているかを例として示したりすることによって、どのような課題設定が求められているのか、現状をどのように調べたらよいのか等を学生たちが理解できるようにしたことである。

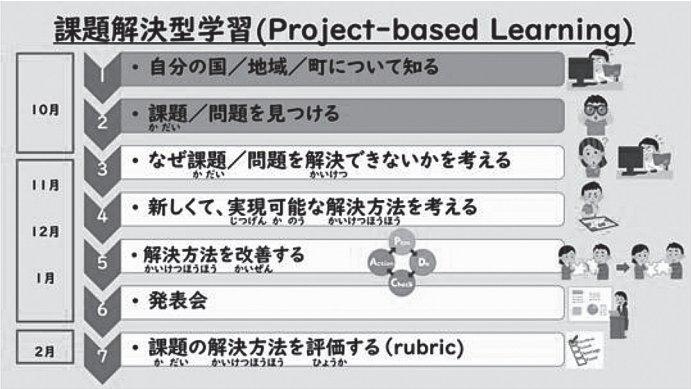

図1　2022年度秋～冬学期第３回授業で使用したフローチャート

４つ目は、クラス内で行われた中間発表会や最終発表会において、TAに質問やコメントのしかたについてのモデル役を担ってもらったことである。TAのモデルを見ることで、学生たちも他の学生のプロジェクトに対して質問やコメントをすることができるようになることを目指した。５つ目は、クラスメート同士の質問やコメントを奨励したことである。具体的には、ルーブリックに他者の発表への質問や意見交換についての項目があることを確認することで、他者のプロジェクトに関心をもち、他者のプロジェクトをより深めようとすることも、PBLに必要なスキルであることの理解を促した。

第二の目的（プロジェクト実施に必要なスキルを発達させる）の達成のために、メイプル・プログラム全体で特別授業を行った。具体的には、第４回の授業での箕面公園と勝尾寺への実地見学、第８回の授業での課題設定方法や行動計画のしかたを学ぶための学外ゲストによる特別セミナー「正しく課題を設定し、行動計画を実行し、課題を解決する」の実施、第12回の授業での箕面の人々の取り組みを知り実現可能な解決方法とはどんなものかを学ぶための、箕面市民との座談会の実施である。特別セミナーでは小林製薬株式会社のグループ統括本社業務改革センターマネージャー（当時）の藤城克也氏に講師役をご担当いただき、座談会では箕面観光ボランティアガイド、箕面船場まちづくり協議会、箕面市国際交流協会、タッキー816箕面FM、こどもの都市Mini Mi～no、JETプログラムで派遣されている外国語指導助手および国際交流員[2)]にゲストとしてご参加いただいた。この特別授業を実施するにあたっては、２つの留意点があった。１つ目は、前週の授業で特別授業の目的、内容、PBLにおける位置づけを丁寧に説明すること、２つ目は、特別授業後にフィードバックの時間を設け、特別授業での学びを各自のPBLに生かせるようにすることであった。

第三の目的（次学期のグループでのPBLに向けてクラス内の人間関係を構築する）については、２つの留意点があった。１つ目は、来日直後のこのクラスの学生の日本語力ではまだ大勢の前で話すことが困難な日本語レベルであったために、少人数で話す活動、すなわちグループ活動を多用したことであり、２つ目は、毎回グループのメンバーを入れ替え、クラス内のだれとでも打ち解けて話せる関係づくりをしたことである。

最終的な成果を評価するためのルーブリックは表５のとおりで、メイプル・プログラム全体で共有しているものである。このルーブリックは、プログラムの目標である「知る」「伝える」「話し合う」という３つのコミュニケーションスキルの発達度合を学生と教員双方が判断するためのもので、PBLに必要な基礎的なスキルの発達度合をみるためのものでもあった。

表５　2022年度秋～冬学期ルーブリック

		チェック項目	スキル
秋冬ルーブリック	1	自分の町／地域／国について、課題を発見することができる	知る
	2	インターネットやその他の方法で情報を調べることができる	知る
	3	どこから情報を集めたのかを参考文献リスト（references）として正しく書くことができる	知る
	4	自分の課題の重要性を伝えるために、必要な情報を選ぶことができる	知る
	5	自分の調べた情報を批判的に（critically）見て、解決方法を考えることができる	知る
	6	自分の調べた情報を伝えるときに、正しく引用する（cite）ことができる	伝える
	7	自分が見つけた課題と、情報と、解決方法を相手にわかりやすく伝えることができる	伝える
	8	クラスの人が見つけた課題と、情報と、解決方法を聞いて、わからないことを質問することができる	伝える
	9	自分の発表についてクラスメートと話し合って、課題の解決方法について、意見を交換することができる	話し合う
	10	クラスメートの発表について話し合って、課題の解決方法について、意見を交換することができる	話し合う

６．2022年度秋～冬学期の学生の学びについての分析

本稿は、どのような授業実践を通してどのような能力が育成されたのかを明らかにすることを目的としている。そこで、プロジェクト遂行に必要な能力育成のために計画、実行した特別授業の効果を分析することによって検証できると考え、学外ゲストによる特別セミナーおよび箕面市民との座談会実施後に学生を対象に行ったアンケート結果を分析した。

６．１　特別セミナーのアンケート結果の分析

まず、学外ゲストによる特別セミナーの効果を分析する。5節でも述べたように、小林製薬株式会社の藤城氏に講師を担当いただき、同社で使用している課題設定シートを使って課題発見から課題解決までの手順を教えていただくとともに、適切な課題とはどのようなものか、解決とはどのようなことであるのかについて、実際に企業内で取り組んだ例を挙げながらご説明いただいた。

表６は、特別セミナー実施後のアンケート結果である。留学生向けにコントロールされているわけではない日本語による、やや専門的な内容の講義であるため、当日配布された藤城氏作成の資料に加え、教師がやさしい日本語に書き換えた補足資料を準備し配布していた。それでも、学生たちは、講義を聞いた直後の理解度が15％～60％であったと自己評価しており、ほとんどの学生が講義の半分も理解できなかったことがわかる。そこで、授業の後半の時間帯はクラスごとに分かれ、各クラスの教師が講義内容についてのフィードバックを行った。その結果、本研究の対象クラスでは、講義の理解度が80％以上となった。このことから、サポートがあれば専門的な内容を理解できる日本語力が身についてきていることがわかった。

表６　特別セミナーに対するアンケート結果（有効回答数８）

ゲストの話の理解度	15%（１人）、20%（１人）、25%（１人）、30%（１人）、40%（１人）、50%（２人）、60%（１人）
教師のFB後の理解度	80%（２人）、85%（１人）、90%（3人）、95%（１人）、100%（１人）
「やさしい日本語」による補足資料	とても役に立った（４人）、少し役に立った（４人）
わかったこと（複数回答可）	小林製薬がどんな会社か（６人）、小林製薬が大切にしている考え方（３人） 課題設定は大事だということ（８人）、PDCAの方法（５人）、 課題設定シートの使い方（５人）、よくない課題とはどんなものか（４人）、 正しい課題設定とはどんなものか（４人）
課題・解決方法発見への役立ち度	とても役に立ちそう（５人）、少し役に立ちそう（３人）

また、ゲストの話の内容について、課題発見や解決方法の発見に役立ちそうだとすべての学生が回答しており、自由記述回答[3)]からも、「STEPの解決方法の考え方です。自分たちにできることはかんがえてぐたいてきな解決をします」「問題解決の戦略をどのように立てるのに教えました。そして、対策の適切な順番についても学びました」など、解決方法を段階的に考えるのがよいことを知り、さらに、「私の町の課題についてもう一度考えて、解決方法を書き直した」など、特別セミナーで聞いたことを積極的に自分のPBLの課題設定や解決方法に生かそうとしたことがうかがえた。このように、特別セミナーを通して、適切な課題設定や解決方法の知識を自分のプロジェクトに生かす方法を考える力が身についてきていることがわかった。

６．２　箕面市民との座談会のアンケート結果

次に、箕面市民との座談会からの学びについて分析する。５節でも述べたように参加いただいた６団体が６ブース（６教室）に分かれ、学生たちは自分の興味に合わせて話を聞きたいと考えた団体の教室に行って、各団体の取り組みについて話を聞いたり質問をしたりした。授業は90分を30分ごとに区切り、１つのセッションを25分（次の教室への移動５分）として、１コマ（90分）の授業の中で１人当たり最大３ブースの話を聞けるようにした[4)]。また、授業終了後には交流の時間を設け、個人的に話をしたい学生やもっと質問をしたい学生が自由に参加しゲストと交流した。翌週の授業では座談会のフィードバックを行い、座談会での学びをもとに、自分の町についての課題解決方法を再考するよう促した。表７は座談会実施後のアンケート結果を示している。

実施後のアンケートでは、自分のPBLに役に立ったと答えた学生は９人中７人で、あまり役に立たなかったと答えた学生は２人であった。自由記述回答を見ると、役に立ったと回答した学生は「新しい解決方法やアイディアを得たからです。それは今まで考えた解決方法と組み合わせられる」「人々に問題を認識させるにはどうやってできるかを学びました」「私の課題に似ているプロジェクトの話を聞いたことによって課題の解決方法について他の面から考えさせた」など、箕面市民の取り組みと自分のPBLを比較して自分の考えた解決方法を再考する力が身についてきていることがうかがわれる。一方、あまり役に立たなかったと回答した学生は「わかりやすかったが、解決方法はゲストさんが詳しく話しませんでした。でも、いろいろなプロジェ

表７　箕面市民との座談会に対するアンケート結果（有効回答数９）

参加ブース（本研究対象クラスからの参加人数）[5]	こどもの都市Mini Mi ～ no（７）、箕面FM（７）、箕面国際交流協会（５）、箕面観光ボランティアガイド（３）、JETプログラム（３）、箕面船場まちづくり協議会（０）
自分の国・町の課題解決考案への役立ち度	とても役に立った（０）、役に立った（７）、あまり役に立たなかった（２）、役に立たなかった（０）
どんな点が役に立ったか	「新しい解決方法やアイディアを得たからです。それは今まで考えた解決方法と組み合わせられる」「人々に問題を認識させるにはどうやってできるか」「私の課題に似ているプロジェクトの話を聞いたことによって課題の解決方法について他の面から考えさせた」など
交流会への参加	参加した（２）、参加しなかった（７）
交流会の感想（参加者のみ）	とてもよかった（２）、よかった（０）、あまりよくなかった（０）、よくなかった（０）

クトが町のためにしているか分かりました」と、解決方法について詳しく聞けなかったことを理由に挙げていた。質問時間を各ブースで設け、授業後には自由に交流する機会も設けたが、学生側からほしい情報を取りに行くということができず、この点で課題が残ったといえる。

座談会全体の感想では「ゲストの皆さんはとても優しくて、話を聞くのもすごく面白かったんです」「箕面の人は私たちと交流したいところを見ると、ありがたいと思います。紹介された場所やイベントに参加したいと思います」「この箕面船場には色々な面白い活動がありますね。できれば、１年色々な活動をして素晴らしい経験になりたいです」など、地域の人々が留学生との関係づくりを望んでいることを知り、今後は自分から地域に出かけようという意欲をもつことにつながったことがわかった。

６．３　2022年度秋～冬学期の学びについての考察

本実践クラスでは、第５回[6]に現時点での各自のコミュニケーションスキルを自己評価し、第14回と第15回にクラスでの最終発表会を実施した後、再度ルーブリックによる自己評価を３段階（○よくできる　△まだできないことがある　×できない）で行って、クラス全体でふりかえりをした。表８はルーブリック評価の結果を集計したものである。

集計結果によると、※印にみられるように、「知る」スキルについては概ね向上したと評価していることがわかった。また、「伝える」については、わかりやすく伝えることや質問をするというスキルは向上しているものの、＊印にみられるように、「正しく引用する」スキルについては課題が残ると捉えていることがわかった。「話し合う」については、自分の発表について話し合うスキルは向上しているものの、★印にみられるように、他者の発表についてはまだ十分ではないと捉えているということがわかった。

次に、2022年度秋～冬学期の３つの目的が達成できたかどうかについて考察する。

第一の目的（PBLの方法を学ぶ）については、表８の一重下線部で示した項目番号１（課題の発見）、５（解決方法の考案）、７（他者への発表・発信）から検討する。まず、項目１に見られるように、課題の発見について、自己評価を始めた当初は３人が「まだできないことがある」としていたが、学期終了時には９人全員が「よくできる」と自己評価している。次に、項

表８　2022年度秋～冬学期のルーブリックによる自己評価（評価ごとの人数）

項目番号	評価項目【コミュニケーションスキルの分類】	第５回授業での評価			第14回授業での評価		
		○	△	×	○	△	×
1	自分の町／地域／国について、課題を発見することができる【知る】	6	3	0	9※	0	0
2	インターネットやその他の方法で情報を調べることができる【知る】	3	6	0	9※	0	0
3	どこから情報を集めたのかを参考文献リストとして正しく書くことができる【知る】	0	2	7	6※	3	0
4	自分の課題の重要性を伝えるために必要な情報を選ぶことができる【知る】	2	6	1	9※	0	0
5	自分の調べた情報を批判的に見て解決方法を考えることができる【知る】	3	5	1	7※	2	0
6	自分の調べた情報を伝えるときに、正しく引用することができる【伝える】	0	3	6	3*	5	2
7	自分が見つけた課題と、情報と、解決方法を相手にわかりやすく伝えることができる【伝える】	1	6	2	7	1	1
8	クラスの人が見つけた課題と、情報と、解決方法を聞いて、わからないことを質問することができる【伝える】	6	3	0	7	1	1
9	自分の発表についてクラスメートと話し合って、課題の解決方法について意見を交換することができる【話し合う】	2	4	3	7	1	1
10	クラスメートの発表について話し合って、課題の解決方法について、意見を交換することができる【話し合う】	0	3	6	4★	4	1

目５の解決方法の考案についても、当初の自己評価では５人が「まだできないことがある」、１人が「できない」と自己評価していたが、学期終了時には７人が「よくできる」と評価しており、概ね達成できていることがわかった。そして、項目７の他者への発表・発信についても、当初の自己評価は「まだできないことがある」が６人、「できない」が２人であったのに対し、学期終了時には７人が「よくできる」と評価している。このように、課題の発見、解決方法の考案、他者への発表・発信というPBLの方法についてほぼ理解できたと捉えられていることがわかる。

第二の目的（プロジェクト実施に必要なスキルを発達させる）については、学期終了時の「よくできた」という自己評価（表８のグレーの網掛け部分）を検討する。これを見ると、項目６（正しい引用）と項目10（クラスメートの発表についての意見交換）はそれぞれ「よくできる」と自己評価したのが３人、４人と少数であり、まだ課題が残ることがわかるが、それ以外はほとんどの学生が「よくできた」と自己評価しており、概ねプロジェクトに必要なスキルを発達させることができたと捉えられていることがわかった。

また、第三の目的（次学期のグループでのPBLに向けてクラス内の人間関係を構築する）については、表８の中に波線で示した項目８、９、10から検討する。項目８（他者への質問）は７人が「よくできる」、項目９（自分の発表についての意見交換）も７人が「よくできる」と自己評価しており、項目10（クラスメートの発表についての意見交換）は「よくできる」が４人

と少なめではあるが、「できない」が当初の６人から１人に減っていることを考えると、学生たちはPBL開始当初と比べて、クラス内での人間関係を構築し意見交換をする力を発達させることができたと捉えていると言うことができるだろう。

これらの結果から、2022年度秋～冬学期の授業実践は一部の課題は残るものの、授業前に設定した３つの目的は概ね達成でき、ほとんどの学生が次学期のPBL実施に向けて、その方法を理解し求められるスキルが向上したという自信を獲得し、クラスメートとのコミュニケーションもある程度できるという安心感をもつことができたのではないかと考えられる。

７．2023年度春～夏学期の授業実践

本節では、渡日後２学期目にあたる2023年度春～夏学期の授業実践について説明する。15回のシラバスは表９の通りである。以下、4.2節で述べた本科目の３つの目的（①前学期PBLの活用、②実際の課題解決への取り組み、③客観的視点によるプロジェクト運営）のためにどのようなことに留意して授業を行ったかについて説明する。

第一の目的（前学期に学んだPBLの方法を活用して、グループでプロジェクトを行う）については、４つの留意点があった。１つ目は、図２のようなワークシートを使用してプロジェクトの計画とグループ内の役割分担を明示することである。グループごとにその日の目標や進度が異なるため、教員がフローチャートで進捗を管理するのではなく、学生自身でプロジェクトの計画を考え、自分たちで進度や役割を管理しながらプロジェクトを運営できることを目指し、第５回の授業にこの活動を取り入れた。

表９　2023年度春～夏学期のシラバス

回	日付	内容【活動形態】	回	日付	内容【活動形態】
1	4/11	オリエンテーション【クラス】	9	6/13	見学旅行の事前講義、進捗の確認 【クラス→グループ間】
2	4/18	課題を探す、グループ決め 【クラス→グループ】	10	6/20	スライドの作り方、中間発表会の準備 【クラス→グループ】
3	4/25	テーマ決め、ゲストへの相談 【グループ】	11	6/27	中間発表会、発表会のふりかえり 【クラス→グループ間】
4	5/9	調べたことの共有、足りない情報の収集【グループ】	12	7/4	発表会のための準備【グループ】
5	5/16	プロジェクトの計画立案 【グループ】	13	7/11	PBL発表会【プログラム】
6	5/23	実地見学の事前講義、調査の準備 【クラス→グループ】	14	7/25	PBLのふりかえり 【グループ→クラス】
7	5/30	実地見学（和菓子作り体験） 【プログラム】	15	8/1	クラスやプログラムのふりかえり 【クラス】
8	6/6	調査結果の分析、発表のタイトル決め 【グループ】			

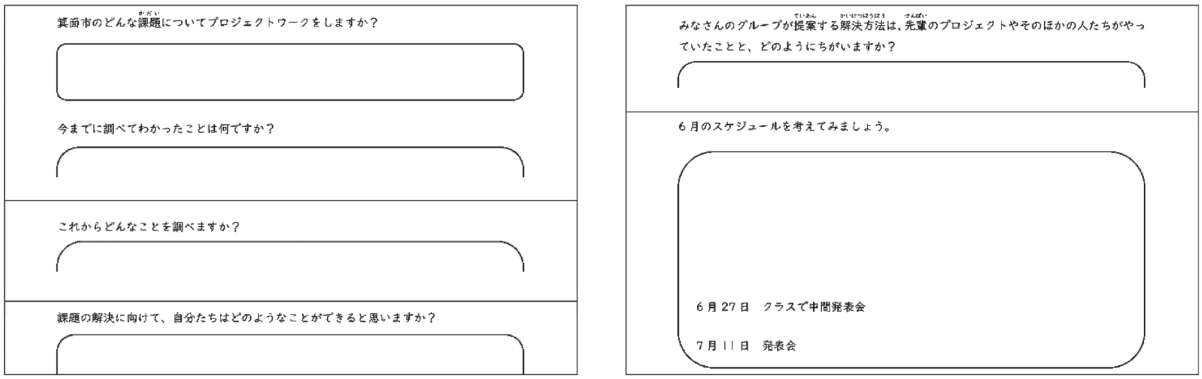

図２　2023年度春～夏学期第５回授業で使用したワークシート

２つ目は、毎回の授業開始時にその日までの進捗報告とその日の目標設定を行ったこと、３つ目は、授業終了時にその日の進捗と次回までの予定を報告する時間を設けたことである。このようにして、学生自身で、プロジェクトの進捗や各自の役割を管理できるようにした。

第二の目的（実際の課題解決に取り組むことを目指す）、すなわち、自分たちが発見した課題に対して解決方法を提案するにとどまらず実際に課題解決に取り組むことを目指すために、２つの留意点があった。まず、計画を立てる際に、自分たちが考えた課題解決方法が実際に実現できるかどうかという実現可能性について考える機会を設けること、もう一つは、教員やTAだけでなく他のグループからの客観的な意見や指摘を得て、プロジェクトの解決方法が「ただ一度やってみただけ」で終わらないものになっているか、継続的に課題を解決できるものなのかという点について考える機会を提供したことである。１点目については、ワークシートを使ってプロジェクトの計画を立てる際に、課題解決のために自分たちには何ができるのかを考え、その問題が解決できたら箕面市がどのような町になるのかを想像するという時間を取った。２点目については、第９回と第11回にグループ間活動として、違うグループの学生同士で３人グループを作り、自分のグループのプロジェクトの解決方法について伝え、その方法の実現可能性について他のグループの学生からの指摘を得るという活動を行った。

第三の目的（客観的な視点を持ち、プロジェクトを運営できるようになる）については、３つの留意点があった。まず、グループ間で進捗を共有することである。このために、第９回の授業で他のグループの人と互いの進捗について情報共有する活動を取り入れた。２つ目はグループ間で客観的な意見交換をすることである。第11回の授業ではグループ間で中間発表会のふりかえりを行い、互いに建設的なアドバイスを行う活動を取り入れた。これにより、他のグループのプロジェクトの情報を得て自分のグループに持ち帰ることができるだけでなく、自分たちが他のプロジェクトに対して建設的な意見や提案を行う経験を通して、客観的な視点をもつということに少しずつ慣れていけるようにした。３つ目に、PBL発表会で他のグループの発表についてメモを取ることによって、PBL発表会が終わった後も引き続き、発表会の質疑応答を経て考えたことや他のグループの発表からアイディアを得たことなどを持ち寄って、グループ内で共有する活動を行った。

最終的な成果を評価するためのルーブリックは２つある。まず、秋～冬学期のルーブリック（表５）を基礎ルーブリックとして使用し、一年を通しての成長を測った。もう一つは、グループでのPBLを行っていく上で身につけてほしい５つのスキルについて10個のチェック項目を含

む、春～夏学期専用の応用ルーブリック（表10）で、これにより能力の発達を測った。この応用ルーブリックもメイプル・プログラム全体で共有しているもので、グループで協働しながら課題を発見し、解決方法を考案し、それについて発信・発表ができるような力が発達したかどうか、さらには自分のグループや他のグループの成果について客観的に評価できる力が発達したかどうかを参照するためのものであった。

表10　2023年度春～夏学期 応用ルーブリック

		チェック項目	目標	スキル
応用ルーブリック	1	解決する必要がある課題を見つけることができた	（1）	課題の発見
	2	見つけた課題の解決がどのような意義（significance）・価値（value）を持つか判断できた	（1）	課題の発見
	3	課題解決のために必要な情報を調べることができた	（2）	解決方法の考案
	4	課題解決の方法を自分たちで考えることができた	（2）	解決方法の考案
	5	自分とはちがう考えを持つメンバーの意見を受け入れることができた	（3）	グループでの協働
	6	メンバーの意見を踏まえて、グループ内で建設的に話し合うことができた	（3）	グループでの協働
	7	自分たちで考えた課題解決の方法や特性や効果を説明することができた	（4）	発信・発表
	8	グループのプロジェクトの過程と成果を過不足なく（多すぎず少なすぎず）表現することができた	（4）	発信・発表
	9	自分のグループや他のグループが考えた課題解決の方法の良いところ・悪いところを客観的に（objectively）評価することができた	（5）	客観的評価
	10	グループで行ったプロジェクトの過程について、客観的に評価することができた	（5）	客観的評価

8．2023年度春～夏学期の学生の学びについての分析

まず、表11の基礎ルーブリックでの自己評価から、2023年度春～夏学期の学びについて分析する。

グレーの網掛け部分からわかるように、項目１～10のすべてにおいて「できない」と捉えるスキルはなくなり、全体的にスキルが向上したと捉えられていることがわかる。また、一重下線部で示したように、2022年度秋～冬学期に課題として残っており、2023年度春～夏学期開始時にも自己評価が高くなかった項目３（参考文献リストの作成）と項目６（正しい引用）に関しても、学期終了時には８人が「できる」と回答し、自信がついたことがわかる。さらに、波線部で示したように、項目10（クラスメートの発表についての意見交換）についても前学期は課題が残っていたが、春～夏学期は７人が「できる」と回答し、「できない」との回答がなくなったことから、他者の発表について意見交換する力が発達したと捉えられていることがわかった。

表11　2023年度春～夏冬学期 基礎ルーブリックによる自己評価（評価ごとの人数）

項目番号	評価項目【コミュニケーションスキルの分類】	第２回授業での評価			第15回授業での評価		
		○	△	×	○	△	×
1	自分の町／地域／国について、課題を発見することができる【知る】	6	3	0	9	0	0
2	インターネットやその他の方法で情報を調べることができる【知る】	3	5	1	9	0	0
3	どこから情報を集めたのかを参考文献リストとして正しく書くことができる【知る】	5	3	1	8	1	0
4	自分の課題の重要性を伝えるために必要な情報を選ぶことができる【知る】	4	3	2	7	2	0
5	自分の調べた情報を批判的に見て解決方法を考えることができる【知る】	1	6	2	7	2	0
6	自分の調べた情報を伝えるときに、正しく引用することができる【伝える】	2	7	0	8	1	0
7	自分が見つけた課題と、情報と、解決方法を相手にわかりやすく伝えることができる【伝える】	5	4	0	8	1	0
8	クラスの人が見つけた課題と、情報と、解決方法を聞いて、わからないことを質問することができる【伝える】	6	2	1	8	1	0
9	自分の発表についてクラスメートと話し合って、課題の解決方法について意見を交換することができる【話し合う】	5	2	2	7	2	0
10	クラスメートの発表について話し合って、課題の解決方法について、意見を交換することができる【話し合う】	5	2	2	7	2	0

次に、応用ルーブリックの自己評価について分析する。

表12の応用ルーブリックについては、まず、グレーの網掛けで示したように、「課題の発見」「解決方法の考案」「客観的評価」という３つのスキルについてはほとんどの学生が「できる」と自己評価していることがわかった。一方、「グループでの協働」については、一重下線部に見られるように項目６で「できる」と評価したのは６人にとどまり、建設的な話し合いに課題が残る結果となった。また、「発信・発表」スキルについては、波線部に表れているように、項目８で「できる」と評価したのは５人にすぎず、過不足なく表現することが難しいと感じている学生も一定数いたことがわかった。

次に、課題が残った「グループの協働」と「発表・発信」について、PBLや１学期間の学びをふりかえるために使用したワークシートの自由記述回答を分析する。

まず、「グループの協働」については、「ちゃんとスケジュールを作って、役割を分けた」「それぞれの役割がちゃんと分けられたと思います」「グループのメンバーに自分の意見を伝えたり、メンバーの意見を聞いたりことで協力をよくできたと思います」などの記述がみられ、協働的で計画的なプロジェクト運営ができたと感じているものの、「どうやってやりたいのか、えんりょうしていて、本当の意見を言ってなかったと思った」という記述もあり、グループメンバーに対する遠慮から建設的な意見が言えない場合があったことがうかがわれた。

表12　2023年度春～夏冬学期 応用ルーブリックによる自己評価（評価ごとの人数）

項目番号	評価項目【プロジェクト実践に必要なスキル】	第２回授業での評価			第15回授業での評価		
		○	△	×	○	△	×
1	解決する必要がある課題を発見することができる【課題の発見】	5	3	1	9	0	0
2	見つけた課題の解決がどのような意義・価値を持つか判断できる【課題の発見】	2	6	1	8	1	0
3	課題解決のために必要な情報を調べることができる【解決方法の考案】	2	3	4	8	1	0
4	課題解決の方法を自分たちで考えることができる【解決方法の考案】	4	2	3	7	2	0
5	自分とは違う考えを持つメンバーの意見を受け入れることができる【グループでの協働】	6	2	1	8	1	0
6	メンバーの意見を踏まえて、グループ内で建設的に話し合うことができる【グループでの協働】	3	5	1	6	3	0
7	自分たちで考えた課題解決の方法や特性や効果を説明することができる【発信・発表】	1	4	4	9	0	0
8	グループのプロジェクトの過程と成果を過不足なく表現することができる【発信・発表】	1	4	4	5	4	0
9	自分のグループや他のグループが考えた課題解決の方法の良いところ・悪いところを客観的に評価することができる【客観的評価】	1	3	5	7	2	0
10	グループで行ったプロジェクトの過程について、客観的に評価することができる【客観的評価】	2	2	5	8	1	0

「発表・発信」スキルについては、他者の前で発表するためのスキル、課題解決のために外部に働きかけをするスキルという２通りのスキルがあると捉えられていることがわかった。１つ目の、他者の前での発表スキルについては、「解決方法をステップに分けて、私たちの思考回路をはっきり伝えられたと思います」「日本語での発表することに自信が持てるようになりました」「スライドを作るスキルが成長しました。必要な情報を選んで、みじかく文で書いました」など、スキルの向上を実感しているとみられる記述がある一方で、「アンケート調査のほとんどの答えを伝えられなかった。もうちょっと時間があったら、答えも発表したかった」など、時間制限のある発表において、情報の取捨選択が難しいと捉えている学生もいたことがわかった。このことから、過不足ない発表という点に課題が残る結果になったのだと考えられる。

２つ目の外部への働きかけをする発信スキルについては、「自分たちは何ができるかとわかったあと、かんけいしゃにそうだんして、次何をすることがわかりました」「課題の解決方法を実現しようとした。［関係者］[7] にメールした」など、外部への相談ができたという記述がみられる一方で、「［関係者］にメール送るのがかなり遅くなってしまいました」と、動き出しが遅くなってしまい期待する結果を得られなかったというグループもあったことがわかった。

「客観的評価」スキルについては、「アンケート調査に基づいて、適切な解決方法を見つけたと思います」「カレンダー（プロジェクトの解決策として作成したもの）[8] の持続可能性につい

てよく考えたと思います」「解決方法は実現できると思うので、データのもとでよく考えたと思います」「他のグループの発表や課題解決についてメモをたくさん書いたので、先学期より客観的に評価できるようになっただろう」などの記述に見られるように、自分たちのプロジェクトに対する客観的な視点が育成されただけでなく、他のグループに対しても客観的に評価できるようになったとする記述もあった。

以上のことから、2023年度春～夏学期の授業実践は、３つの目的を概ね達成できたが、グループで建設的な話し合いをするという点、過不足のない発表をするという点では課題が残ったとまとめることができる。また、発信については、外部への働きかけが遅れ、課題解決方法の実践に移るまでに時間切れとなってしまったグループがあったことも課題の一つであろう。

９．まとめと今後の課題

本実践から、日本語能力が中級レベルと中上級レベルの混在クラスにおける、2022年度秋～冬学期から2023年度春～夏学期にかけてのPBLを通して、２つのことが明らかになった。

１つ目に、心的変容を基盤として協働力、発信力、客観的分析力などジェネリックスキルの発達がみられた（図３）。１学期目の３つの目的から、まずはPBL実施への自信と、クラスメートとの関係性への安心感が得られ、それを基盤として、２学期目にはさらに高度なレベルでのPBL、すなわち、グループでのPBLを行うことができ、これを通してジェネリックスキルの発達が促されたと考えられる。ジェネリックスキルは、上岡（2019）が「市民生活を送る上や、仕事をしていく上で必要となる汎用的能力」と定義しているように、現代社会の中で多様な人々とともに市民生活を送り、多様な人々と協働して仕事をしていくうえで必要な能力であると考えられる。本プログラムにおけるPBLは、単に箕面市という地域への理解を深めるだけでなく、自分たちの住んでいる地域の課題を自分事としてとらえ、自分たちが行動を起こすことで解決につながるような、実現可能な解決方法を考え、その実践を目指す中で、協働力、発表・発信力、客観的分析力といったジェネリックスキルが発達したと実感できたのではないかと思われる。

２つ目は、プロジェクトの質的変化である。１学期目のPBLの方法を学ぶ段階では、教師が各活動の目的を丁寧に説明し理解を促したり、プロジェクトのペース配分をコントロールしたりするなど積極的な介入をすることによって、学生が自分のプロジェクトを進められるようにしており、教師を中心としたトップダウン的なプロジェクト運営であったといえるが、２学期目には、教師が一つ一つの段階を指示しなくとも、学生たち自身が主体となって計画を立て、分担し、調査・分析し、発信のしかたを決めるなど、自律的なプロジェクト運営をしていた。２学期目に教師が唯一求めたものは、クラス全体での報告と、グループ間の報告で、これによって自分たちのプロジェクトを客観的に捉え、ひとりよがりにならないプロジェクトを目指す観点が保たれており、客観的分析力・発

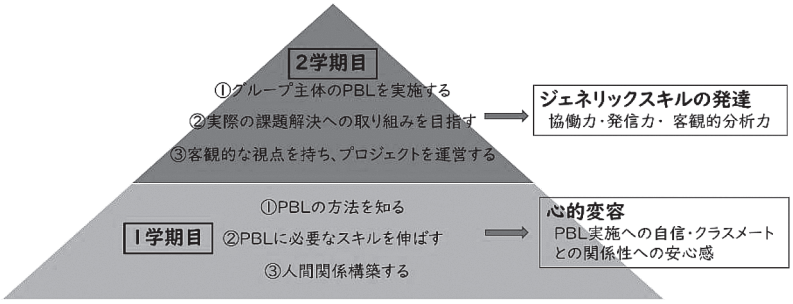

図３　心的変容を基盤としたジェネリックスキルの発達

信力の発達につながったと考えられる。

また、クラスメートの捉え方にも質的変化がみられた。1学期目は個人としての活動であったため、クラスメートの存在は自分のPBLの内容を報告する相手にすぎなかったが、2学期目には、同じグループメンバーについてはプロジェクトを共同運営していく仲間とみなし、違うグループのクラスメートについては、自分たちのプロジェクトに対する第三者的視点をもったご意見番的存在として捉えるようになっていった。この位置づけの変化が、積極的にグループメンバーやクラスメートと関わることにつながり、最終的には協働力の発達につながったのではないかと考えられる。

本実践の課題は、学生たちが、人的リソースや時間的制限の面で「自分たちにはここまでしか無理」という枠を決めてしまっていたために、自分たちにできる範囲でのプロジェクト、言い換えれば、自分たちしか見えていないプロジェクトになってしまったことである。1つ目に、人的リソースを活用しきれなかったことにより課題解決方法の実践には至らなかったことが挙げられる。この要因として、「(学外の人に話しかけることが)はずかしい」といった心理的な障壁があったために、関係する人々・機関への働きかけを行うまでに時間がかかってしまい、実践に至る前に時間切れとなってしまったことが考えられる。2つ目に、半年しかないという時間的制限を気にするあまり、課題設定・解決方法が小さくまとまってしまい発展性に欠けてしまったことが挙げられる。この要因としては、半年間でどこまで大きなプロジェクトができるかというイメージが描けていなかったことが考えられる。3つ目に、長期的な計画を立てていない、あるいは、プロジェクトの継続性への思いはあるが具体的な計画はなかったという、将来の人的リソースの活用とそれにつながる長期的視野に立った時間の活用に関する課題である。この要因としては、どうなれば課題解決といえるのかという最終的な目標の設定ができておらず、後輩達にプロジェクトを引き継いでほしいという希望はあるがどう引き継いでもらうかまでは考えていなかったことが考えられる。

PBLは学生主体で行われる活動であるが、このような学生たちの枠が外せるよう促すことが教師の重要な役割になってくるのではないだろうか。今後、求められることは、①箕面のためという共通目的を地域の人々と共有し、地域の人を「協働のメンバー」として捉えて助けを求められるような体制の構築(ハード面)と、学生が地域住民に助けを求められるような心理面でのサポート(ソフト面)であろう。また、学生が求める課題解決の全体像を描かせること、すなわち、どうなれば本当に解決したと言えるのかを学生たちが考えられるようにすることが必要であるともいえるだろう。本実践の学生たちは、「半年間の計画」を立てただけに終わっており、彼らのプロジェクトは「自分視点」から脱することができていなかった。これに対し、たとえば、「5年後、10年後どうなっていたらいいと思うか」ということを教師が学生に問いかけることも一つの方法であろう。PBLにおける教師の役割について、今後も考えていきたい。

注

1)本実践では、各学生が故郷だと思っている国、地域、町、あるいは、各学生がよく知っていると思っている国、地域、町を「自分の国・地域・町」としている。

2)JETプログラムからの参加ゲストはメイプル・プログラムの修了生で、当時箕面市立第五中学校に外国語指導助手として派遣されていたデング・ハウィ氏と長野市役所に国際交流員として派遣されていたイサッ

ク・レイラ氏に参加いただいた。

3）自由記述回答は、文法や語彙・表現上の誤りがあっても修正せず、学生が記載したまま記述している。

4）3セッション目は自分のクラスの教室に戻り、クラス担当教師とともに、各ブースで聞いた内容を共有する時間を設けたクラスもあった。

5）参加ブースが1つしか記入されていない回答があったため、延べ参加人数の合計は27になっていない。

6）学期が始まったばかりのPBLへの理解が浅い時期（第1～4回授業の時期）には適切な自己評価が難しいと考え、第5回の授業で1回目の自己評価を行った。

7）もとの学生の記述に固有名詞が記載されている箇所は［関係者］と表記した。

8）括弧内は、筆者による加筆である。

参考文献

板橋民子・桐澤絵里奈・高田亮・渡辺若菜（2020）「地域に飛び込んで行う言語プログラムの可能性―サービス・ラーニングの観点からの学びの検証―」『APU言語研究論叢』5 pp.56-71

岩井茂樹・小森万里・立川真紀絵・松浦幸祐（2023）「短期交換留学プログラムにおける産学民連携型セミナー開催の意義と課題」『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』21 pp.1-14

金丸巧（2021）「留学生・教師・地域住民をつなぐ日本語教材とは―主体的な日本語の獲得と関係性の編み直しに着目して―」『東亜大学紀要』31 pp.41-56

金丸巧（2022）「日本語教育における『地域に根ざした活動』の意義―留学生と地域住民のつながりに着目して―」『早稲田日本語教育学』33 pp.81-100

上岡史郎（2019）「アクティブラーニング型授業によるジェネリックスキル向上に関する一考察」『目白大学短期大学部研究紀要』55 pp.1-13

島崎薫（2018）「地域住民との国際共修で留学生は何を学んだのか―仙台すずめ踊りの実践を通して―」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』4 pp.397-406

菅川裕希（2023）「サービス・ラーニングにおける留学生の学びと変化―地域のこども食堂でのサービス活動を通して―」『広島大学日本語教育研究』33 pp.24-31

立川真紀絵・小森万里・岩井茂樹（2022）「短期交換留学プログラムにおける地域連携型PBLの実践と課題」『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』20 pp.1-11

中島祥子（2013）「多文化間プロジェクト型協働学習における留学生の学び―留学生と日本人学生がともに地域を学ぶプロジェクトから―」『鹿児島大学教育学部研究紀要．人文・社会科学編』65 pp.133-148

村越純子（2021）「小川町にぎわい創出課との連携による地域教育―留学生対象『日本文化研修Ⅰ』における学外授業―」『地域と大学 城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要』1 pp.28-56

林翠芳・大塚薫（2023）「地域との継続的な互恵関係の構築―学びを地域に還元する場の形成―」『高知大学留学生教育』16 pp.33-76

参考サイト

Maple Program「プログラムの目的・概要」 https://maple.cjlc.osaka-u.ac.jp/about/（2023年12月26日アクセス）

（こもり　まり　本センター教授）

（ふじひら　まなみ　本センター講師）